

特 255

191

新  
滿  
洲  
の  
旅



始



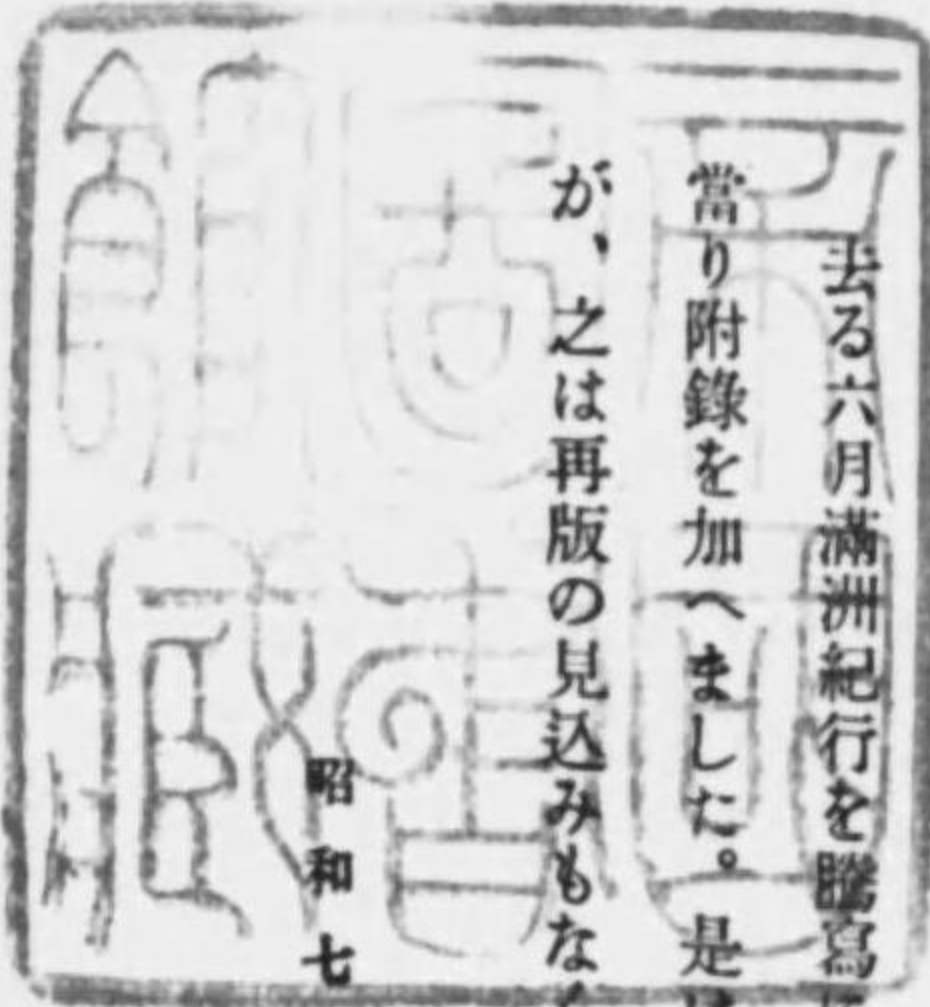
特 255  
191

發行のことば

去る六月滿洲紀行を購寫に代へて若干部印刷し知人に頒ちましたが、希望者が多いので品切れとなりました。今發行に當り附録を加へました。是は大坂東洋學會發行『亞細亞研究』第十號の拙稿「氣候と歴史」に附けるのが適當と思ひますが、之は再版の見込みもなく、全じく滿洲關係の事柄ですから、この冊子の巻尾に加へた譯であります。

昭和七年九月十五日

中  
目  
覺



## はしがき

昭和七年五月廿一日神戸解纜のうすりい丸に乗り、同廿四日大連上陸。旅順、奉天、長春、ハルビンを視て、六月四日再び大連に返り、はるびん丸に乗船。六月七日神戸上陸直ちに歸阪した。

明治四十年四月歐洲よりの歸途始めて滿洲の地を踏んで以來、此地に遊ぶこと今度で六回目、いつもの様な飛脚旅行に朝野多数の人士に面接し、七十名に餘る卒業生に送迎せられ、日誌を草するの暇だになく、僅かに往復の船内で記憶をたどりて記した數篇を上梓して知友に分たんとする。名づけて『新滿洲の旅』といふ。

昭和七年六月七日

大阪に於て

中 目 覺

## 目次

- 一 海上の誕生日
  - 二 大連に於ける談話
  - 三 國際聯盟の調査委員
  - 四 奉天に於ける談話
  - 五 新京(長春)に於ける談話
  - 六 哈爾濱に於ける談話
  - 七 滿洲國執政に謁見
- 附録 滿洲の降雨

## 新滿洲の旅

### 中目覺

#### 一 海上の誕生日

今日是我輩の誕生日である。海上で誕生日に遇うたのは生れて始めてである。京都大學病院の病室で一度誕生日を迎へたことがあるが、同じ一度でも病室内よりは船の一等室の方が何となく縁起がよい。又大阪の煙の中よりも黃海の波の上の方が遙に氣持がよい。

一昨日神戸出帆の時は雨であり、昨日門司を出た時は曇り勝りで風にでもなりそうであり、夜中は霧の爲め殆んど夜通し汽笛が聞えて居つたが、今朝起きて見ると、うすい丸は朝鮮西南海岸の嶋々の間を走つて居るが、非常な好天氣である。天も我輩の誕生日を祝してくれる様である。

そればかりではない。人の勤めるまゝに、午前一回、午後二回、デッキゴルフを試みた。そして三戦三勝した。三戦三勝は善の善なるものに非ずかも知れないが、之も誕生日の勝負としては縁起がよい。三度共京大の中澤博士と組んだ爲めかも知れぬ。

も一つ。ラチオの報道では、齋藤實子爵に内閣組織の大命が下つたといふことである。先年高橋是清氏が仙台人として始めて總理大臣になり、郷黨を喜ばせたが、復た仙台から總理大臣を出したので、舊仙台領では大よろこびであらう。大藩の後であるから、今後十年に一度位は總理大臣を出したいものである。之も誕生日の報道としては目出度い話である。

昨日の午前、二三通の手紙や端書を書いた。その中、伯林の長男宛のものには先日送つて来たゲオポリークの新刊物二冊到着の禮を書いて置いた。それで思ひ出すのは、明治三十一年我輩が東京在學中、資治通鑑一部を買ひ求めて父へ送つたことである。時々

通鑑は未だ讀んだことがない、一度讀んで見たいものだ

といふのを聞いて居つたからである。父は其返書に次の詩一篇を書き加へて居つた。

七十三年垂死翁 久來宿願一朝充

窓前堆積温公史 老眼難期看讀終

我輩は漢詩を作らぬから、長男へは散文で禮を書いてやつた、但し候文にするだけの手数をかけた。

本は來ても未だ讀む暇がなかつた。旅行中に讀まうと思ひ、ヘンニヒのゲオポリーク(一九三二年出版)を一冊持つて來て、昨日から時々讀んで居る。中々面白い。

ハンデルスポリークが商業政策、コロニアルポリークが殖民政策、ソチアルポリークが社會政策と譯されるならば、ゲオポリークは方に地理政策と譯さるべきであらう。然し内容から考へると國家盛衰學と稱する方が妥當であらう。從來の人文地理、政治地理、軍事地理などから國家の盛衰興亡と地理との關係を一纏めにしたものである。獨逸のラツツェルや佛蘭西のタル下などの思想に基き、世界戦争後の國家興亡を目撃した地理學界の新人等が作り上げた一派である。

此書の教ふる所は東洋では決して珍らしくない。唯だ西洋の學者も茲に着目する様になつたのは晚しと雖も結構なことである。東洋の學者は昔から國家社會の盛衰興亡の理を考へて居つた。學問の目的は修身齊家治國平天下に在つた。修身齊家に於ては何人にも必要なこと、治國平天下に於ては政治にたづさはる人の心得べきことを教へたのである。人も家も國も共に衰亡を避けて永續發展すべきことを教へた。系圖を尊ぶのも、祖先を祭るのも、墓參をするのも、養子をもらふのも、家の永續發展のためである。我國には三百年間の系圖を提出し得る家が何十萬とあるであらう。所が歐洲では、少數の貴族が三百年の系圖を誇り得るだけで、一般民衆の間では、三代前が何處の馬の骨やら判らぬといふのが普通である。そして單に白色人だと言つて威張つて居る。又我國の華族の中には、五百年七百年間の正確な系圖を傳へるものが相當多いが、西洋の諸國が總がりでも是程の舊家を探ることが出来ないであらう。此の如く家といふものに永續性を持たせ、其家を澤山集めて國を形作り、國にも永續性を與へようとするのが、東洋諸國の常につきこめる所である。そこで東洋の國々には盛衰があつても容易に亡びない。日本支那が最も良い例である。しかし家の永續性を失へば國も危くなる。

ヘンニヒの著書を読むと、西洋の國家といふものが、基礎が極めて薄弱であるか、或は何等建國の理想がなくて、烏合の衆が偶然指導者を戴いて國となつたかに過ぎない様に思はれる。此書を読んだり、西洋諸國を旅行したりすると、我が國体の有難さが段々と感ぜられて來、又皇祖の御遺訓

葦原ノ千五百秋ノ瑞穂ノ國ハ是吾子孫ノ王タルベキ地ナリ。爾皇孫就シテ治シタマヘ。行矣。寶祚ノ隆エマサンコト天壤ノムタ無窮ナルベキモノゾ

といふ御言葉は世界に比類なく尊いものであり、三千年の間に此御遺訓の精神が随分よく國民間に行き渡つて居るこゝが判る様になる。

次に我國戊辰の政變を考へて見るに、其以前は一國家といふよりは、大小の國が澤山あり、徳川時代には徳川氏が盟主

たる聯合國であつたと見る方が妥當であらうと思ふ。當時の大藩なるものは殆んど國の體裁を備へて居つた。そして是等の大小の國々は、民族風俗の點に於ては大體に於て異なる所がないが、地理上の關係で色々特色を持つて居つた。戊辰以後六十餘年の今日に至るまで、我國では縣人會とか同郷會とか云ふものが盛んである。かゝる現象は西洋諸國に於ては到底見られないのである。是は一には家を重んじ、故郷を重ずるの結果であり、又一には昔の藩なるものが國の性質を有して居つたからである。

ゲオポリチクは國家盛衰學であると言つた。この國家の盛衰に關する觀察は東洋では早くから色々書物に散在して居る。そこで萬卷の書を読むには及ばぬとしても、千卷位の書を読まぬと、東洋の國家盛衰學が能く飲みこめない。そこになると、西洋の學問は専門でまごまつて居るから、便利である。澤山の本を読む暇のない人は、國家盛衰學に於ては、ヘンニヒの著書の如きものを読むのがよい。我輩も暇がないから、旅行中に読むことにして居る。

我輩は『氣候と歴史』の結末に於て、政治家などは、少し此方面のことでも研究するとよいと言つて置いたが、苟も國家の政治にたづさはる人は地理政策位は讀んで置く方がよい。今日の政黨の陣笠なるものは、治國平天下とは全く没交渉の輩であるから、彼等に讀書を望むのは無理かも知れぬが、政黨の幹部ともあらう者は、何時大臣になるか判らない。大臣となれば治國平天下の専門家である。此の如き人々に取りては國家盛衰學が必須の教科目であらう。私は大臣學に志す人士に此書をすゝめたい。

(昭和七年五月廿三日　うすりい丸船室に於て)

## 二 大連に於ける談話

五月廿五日大連で同窓會が開かれ、來會者十餘名舊友小野木氏も同席、其席上で次の如き談話を試みた。

今夕は難有う。諸君の自己紹介により、諸君が色々方面で御活動の模様を承りて愉快に存じます。私にも一言させていたゞきます。

如何なる地方、如何なる職務にありても、永住の覺悟を以て其職務に努力すれば、間違がないと思ひます。此席に見えて居られる小野木君は一昨年も此會に出席されたが、同君は當地のロータリー俱樂部の會員であります。この俱樂部は各自が其職務に勉勵することによつて社會に奉仕するといふ事を目的の一として居ります。己れの職務に盡すことは己れの爲めにもなり、又社會の爲めにもなる。此精神が諸君にも強く働くことを希望したい。又小野木君は先年私に斯ういふ事を言はれた。

滿洲に居る日本人の多くは、職を去ると直ぐ家族をまこめて内地へ歸つて行く。是では日本人の滿洲發展は到底望まれない。自分は元と滿鐵に居つたが、職を止めても終生踏み止まる考で、家も建て、斯うして暮して居る。一人でも一生滿洲で暮すといふ人間が多ければよいと思ふ。

小野木君の此言葉を聞いて私は非常に感動しました。諸君もどうかロータリーの精神をもつて、又永住の覺悟で働いて欲しい。

滿洲は尙ほ混沌時代である、之は却つて青年諸君に取つて働き甲斐のある時代である。働けば必ず其報ひが來るにきまつて居る。盤根錯節を切り抜けて男らしく人生の大道を濶歩して、後進の爲めに範を垂れていたゞきたい。

この機會に於て小野木君に感謝の意を表したい。我が同窓會はまだ若く、先輩も六七年前の卒業に過ぎない。此の

如き際に、老先輩の代りをしてくれられる小野木君には御禮の言葉がない程難有い。どうか今後とも御面倒を御願致します私の舊友で同窓諸君のために少からぬ同情を表して呉れられる人に、北京に井上氏あり、哈爾濱に軍司氏がある。此等の三君はいづれも二十年三十年と其地に踏み止まつて居る方々で、斯く永く滞在するといふこと夫れ自身が既に大なる功績であると思ふ。

今日は私のために此盛會を開いていただき、改めて御禮を申し上げます。

### 三 國際聯盟の調査委員

滿洲事變が起つて國際聯盟の問題となつたが、其議員連には滿洲に關する認識が不足といふ理由で、調査委員が来ることになつた。言ひ換へれば、滿洲に關する智識が不充分だから、西洋から東洋へ留學に來た譯である。大に留學の甲斐があつた事と思ふから、次に所見を述べて置かう。

私が大連を去つた五月廿六日の朝、一行は奉天から大連に着き、私が大連出帆の六月四日に一行は奉天から北平に向つて去り、一度も落ち合はなかつたのは仕合せであつたとも思へるが、一行中の誰とも話が出来なかつたのは不幸とも云へる。

正員は英佛米伊獨各一人で、いづれも植民地事情通といふ事であるが、一行の中誰も滿洲は未だ見た事がない様である其上滿洲に働いて居る日支人の言葉の判る人が一人も居ない様である。そして調査をしようといふのだから、無理があり充分の認識が得られぬ事は當然であると思ふ。

以上の欠點がある上に、歐米人には、有色人に對して公平の判断が出来ぬといふ弱點がある。白人に取り有利な事が何

でも善で、不利な事が惡と信ずる先天的の偏見を持つて居る。そして滿洲を判断しようとするのだから、如何に老大な報告書が作られても、餘り價値のあるものにはなるまい。

五人共、渡滿前に頭の中に凡そこんな事を思がいて居つたであらう。

日本人がいくら進歩したと言つても、亞細亞の黄色人である、又完全な植民地にもならぬ滿洲だから、吾々の植民地に較べて數等劣る、貧弱なものであらう。住民は高粱を食うて大豆を輸出するといふから、地味の善い野山に生えるこんな野生の植物を刈り取つて、食糧としたり、又外國へ賣り出したりするのであらう。石炭があるといふが、それも地面に露出してる部分しか掘れず、堅坑だのエレベーターなどの入らない露天掘りで満足して居るのであらう。鐵道が通して居るといふが、無蓋貨車に半裸体の苦力を載せて走るものだらう。

そこでリットン卿はケニアに、クロードル將軍はマダガスカルに、マッコイ將軍はフィリピンに、マレスコッチ伯はエリトリアに、シネー博士はタンガニカに、滿洲を比較したであらう。そして此等の植民地よりは遙に御粗末な所であらうと想像したものと思はれる。

大連奉天の人口が如何に多くとも、吾々の植民地のナイロビ、アンタナナリボ、マニラ、アスマラ、ダレスサラムの如き現代都市には及ぶまい。草葺に紙の窓の平屋が不規則に散ばつて居る大村落であらう位に想像をめぐらして居つたものと思はれる。

一行は來て、見て、始めて其認識の不足を覺つた。大連奉天哈爾濱は、いづれも三十萬から六十萬の人口を有する大都市である。且つ大連哈爾濱の如きは、純然たる現代都市であり、奉天長春も鐵道附屬地は現代都市である。

一行は農業に於ても、工業に於ても、交通に於ても、豫想と現實との非常に違ふのに驚いた事であらう。茲に一行が比較の標準とした植民地と滿洲との比較表を掲げる。之を見ただけでも、一行に取りては相當の學問になるであらう。

地名	面積	人口
滿洲	九〇萬方キロ	三、三〇〇萬
ケニア (英)	六四〇〇〇	三〇〇〇〇
マダガスカル (佛)	五九〇〇〇	三六〇〇〇
フィリピン (米)	三〇〇〇〇	一、二〇〇〇〇
エリトリア (伊)	一二〇〇〇	四〇〇〇〇
タンガニカ (舊獨)	九〇〇〇〇	五〇〇〇〇

右の地方の都市人口は

地名	人口
大連	三八萬
奉天	五〇〇〇
哈爾濱	五〇〇〇
長春	一五〇〇〇
ケニア	五〇〇〇
ナイロビ	五〇〇〇
マダガスカル	七〇〇〇
アンタナナリボ	七〇〇〇

地名	面積	人口
フィリピン		二九〇〇〇
マニラ		九〇〇〇〇
セブ		八〇〇〇〇
イロイロ		八〇〇〇〇
エリトリア		一萬八千
アスマラ		一萬八千
タンガニカ		二萬五千
ダレスサラム		二萬五千

滿洲に對する公平な判断を一行に望むのは無理であるといふ意味のことは前に述べて置いた。英佛米伊の四國はいづれも植民地を持つて居るが、ドイツだけは植民地を持つて居らぬ。そこで五人の中ではシネー博士が比較的公平の判断を下すであらうが、シネー博士の意見が餘り採用されそうにもないといふことも想像に苦しまぬ所である。一行中で同博士は識見經歷に於て斷然頭角をあらはして居り、他の四人は死後世の中から忘れられるであらうが、同博士だけは其名が後世まで植民史に残るであらう。

シネー博士は世界大戦中、東アフリカで英軍に包圍されながら、休戦に至るまで降参せず、巧に難をさけて居つた。其間敵は包圍軍中には日本軍が加つて居るといふ流言を放つて博士を驚かした。幾度か悪夢におそはれた事であらう。今又滿洲へ來て、日本人の努力によつて立派な國の出來たのを見た博士は、カイゼルの黃禍論を思ひ出して再び悪夢におそはれることであらう。

茲に私が同博士について嘗て海外視察録に書いた事を引いて見よう。



借て戦争の経過であるが、イギリス側で書いたものばかりでは公平の判断が出来ぬから、二冊程個人側のものも見た。一は戦争開始當時の長官であつたシネー博士が、休戦後バイエルンの高原で執筆して、一九一九年に發行された「世界戦争中の獨領東阿」、もう一つは同長官の下に守備隊司令官であつたフォン・レットウフォルベック將軍（戦争開始の時は中佐、休戦までに少將に昇進）の「東阿回想録」である。前者は面白かつたから全部讀んだが、後者は拾ひ讀みをしたに過ぎない。

シネー博士の著に於て、戦争の間に處々産業上のことや行政上の事なども書いてあつて、中々有益なものである。東阿に限らず殖民地の統治者などの良教科書であると思ふ。

（海外觀察録第九號四七頁）

シネー博士に就いては是位にして置いて、又五人共通の感想に移らう。

白人は有色人を驅逐すべきもので、有色人に驅逐せられるなどいふ事は有り得べからざる事である。一行は信じて居た。又英語と佛語は、天下何處へ行ても通るものゝ考へて居た。然るに長春のホテルや満鐵の食堂車に於て、奉天や哈爾濱の市中に於て、一行は何を見せつけられたか。金髪碧眼の白人の娘さんが給仕に出る、此女給連には英語も佛語も通らない、日本語支那語露語を巧に使ふ。又市中では馬車や自動車がナイロビ、アスマラ、ダレスサラムなどよりも遙に多く走つて居る。乗る人は日本人と支那人で、御者と運轉手には白人が多い。又カバレに於けるブロンドの美人は英佛語は解さぬが支那語を巧にあやつつて有色人に媚を呈する。

此光景に接した一行は、スベングレルの『西洋の没落』の實現を夢みる心地がしたであらう。この惡夢を掃はんが爲めに幾杯かのキスキーミリキュールを傾けたこゝであらう……ハルビンのカバレに於て。

一行は、亞細亞の東端には西歐に劣らぬ活躍世界の存在することを始めて學んだであらう。其報告に於て如何に日本を惡ざまに誣ゆるとも、心の中では東洋の天地に敬意を表することであらう。或は恐怖を感じぬとも限らない。己れを知つて他を知らなかつた白人調査委員も知彼知己に至れば、世界平和のため慶すべきこゝである。

（昭和七、六、十二稿）

#### 四 奉天に於ける談話

五月廿七日奉天に於ける同窓會に出席者十餘名、其席上次の談話を試みた。

今夕は難有う。我が同窓會はまだ若く、先輩後輩と言うても、兄たり難く弟たり難き程度である。従つて後輩諸君が先輩諸君に物質的の援助を求めるのは無理であり、單に敬意を表し、色々精神的の指導を受ける覺悟を要する。又先輩諸君も後進を援助してやりたいといふ希望は山々であらうけれども、意の如くならざる點も少からぬ事と同情する。唯だ後進の諸氏に過失のない様に注意すれば良からうと思ふ。

此に關聯して一昨年滿洲へ来た時思ひ付いた事は、會員の倶楽部の如きものが出来て居れば、滿洲で働かうといふ人が先づ此處へ来て、費用が少く滞在が出来、そして機會を待つ様であれば都合がよいといふ事であつた。一昨年は理想として、奉天、上海、シンガポールに各一ヶ所づゝ此種の會館が出来れば、國外に於ける就職上會員のため便利であらうと考へた。處が滿洲國が新に出来た今日に於ては、理想論よりも實行が急務である。又熟考よりも拙速を尊ばねばならぬ。それで此件に關して大連の會員なども相談し、又昨日來諸君の中の二三の有志にも謀つた事であるが、早く實現させて見たいものである。私も出来るだけの援助はしたいと思ふが、一旦成立の上は、當地なり滿洲全体なりの會員の協力によつて其存続を計つてもらいたい。

今夕の御厚意を謝すると同時に、此會館設立について御一考を煩はしたいと思ふ。

#### 五 新京（長春）に於ける談話

五月三十日長春に同窓會開かれ、遠くは鄭家屯梨樹縣等から來會の會員もあつた。之は其席上に於ける談話の概要である。

今夕は難有。諸君の多数は滿洲國新政府の職員であるから、諸君の心得に就いて、老婆心から一言述べさしていただきたい。

我が國民は、日清戦役以後、廣い意味に於ける新政府の經驗を屢々有して居る。即ち臺灣、關東州、滿鐵、朝鮮などの新政府がそれであり、今また滿洲の新政府を背負つて立つといふ境遇に置かれて居る。

これ迄の沿革に徴すると、新政府の出来る時には、多数の職員を要するから、有象無象が蟻の甘きにつくが如く集つて来る。玉石混交である。そして誰もが一かどの政治家を氣取り、我輩あらずんば新植民地の蒼生を如何にせんといふ様な盛な意氣を有して居る。この意氣は誠に愛すべきであるが、首腦者は一人で澤山である。この一人の方針を忠實に實行する實務家や刀筆の吏が入用である。さて大政治家を以て自ら任ずる意氣が、いざ實務となると、算盤もはぢけず、圖も引けず、敷地の測量も出来ず、契約書も書けず、況や統計表を作るに、設計案を草するとかになると、何の役にも立たない。そこで船頭多くして船山に登るの觀を呈する。之は臺灣の場合も、滿鐵の場合も同様であつた。

そこで治績が擧らず、放棄論さへ起ることもあつた。首腦者は此に至りて始めて、是ではならぬと思ふ様になり、二三年にして無能者淘汰が行はれ、第一期の職員が過半消えてしまふといふ結果になる。其際忠實に職務に勉勵した人は必ず居残り、之が柱石となつて始めて治績が擧り、今日の臺灣、滿鐵、朝鮮などは多少の非難があつても、世界に誇るに足る植民地となつたのである。

滿洲國では職員採用に嚴選をしたといふが、やはり玉石混交は免れまいと思ふ。そこで二三年の中に無能淘汰時代が来るものと覺悟せねばならぬ。無論嚴選された人々であるから、適材適所の轉免といふ事になるであらうが、無能者は閑散の地とか避障の地とかへ向けられ、有能者が重要な職に轉ずるといふ事になるであらう。此事を絶えず念頭に置き、職務は飽まで忠實に勤め、衆目の視る所となつて居れば、來らんとする異動時代に於て諸君の榮進を見る事必せりである。

思ふ。どうか御互に扶け合ひ、意氣に於ても、實務に於ても、大國を背負つて立つ積りで努力せられたい。

次に滿洲國民三千萬の大多数は支那語を使ふ者である。此民衆を相手とする政治にたづさはる諸君は支那語を充分に解さねばならぬ。數年の中に滿洲の言葉が日本語に變るなどいふ考は無學者の夢である。一國の言葉が變つたのは二つの例しかない。古代に於て、グチア、インフェリオレ(今のルーマニア)が羅馬帝政時代の百五十年間にラテン系の言葉に變じたのミ、近代に至つては、滿洲人の言葉が三百年間に支那語に變じたのとだけである。しかもグチア人も滿洲人も三千萬は無かつたのである。日本語が國內到る處通用する様になるであらうが、國民の常用語は何時までも支那語であらう。故に諸君は此國語に通ずるといふことを勉めていたゞきたい。

今夕は諸君の元氣横溢せる會合に御招き下され、改めて御禮を申し上げます。

## 六 哈爾濱に於ける談話

ハルビン滞在の三日間、朝野の名流外語同僚會員等數十の諸氏と共に和、洋、支、露の宴會席上で、意見の交換を爲すの機會を得た、私の述べた意見を綜合すれば左の如きものである。

短時間の視察によつて新滿洲の真相を知るなどいふ事は不可能事であり、又私は之を知らうともしない。私の言はんご欲する處は見ても見ないでも出来る程度のもので、必ずしも滿洲に來なくとも言へることである。既に滿洲國といふものが出來た以上、我々は如何なる覺悟を要するかといふことに就いて所見を述べて見たいと思ふ。

先づ滿洲國建國宣言なるものを見る。始めに建國に至るまでの沿革を述べ、次いで新國家の方針に及んだもので、實に堂々たる一大文章である、日本以外に此の如き宣言をなし得る國は世界の何處を探してもあるまいと思ふ。先づ是が大成功である。吾々は東洋人として此宣言を飽迄現實化するこゝに全力を注がねばならぬと思ふ。此建國宣言の精神を滿洲國

内に普及せしめ、誰が見ても非難の打ち所がない様にするここが必要である。それには少くも十年の歳月を要するかと思ふ。我が日本は此事業に五十年を要したから、滿洲が十年で夫れが出来れば大成功であると思ふ。此宣言中最も大切な点は竊維政本於道、道本於天、新國家建設之旨、一以順天安民爲主、施政必徇真正之民意、不容私見之或存、凡在新國家領土之内居住者、皆無種族之岐視、尊卑之分別、といふ言と

即其他國人、願長久居留者、亦得享平等之待遇、保障其應得之權利、不使其有絲毫之侵損、といふ言に在る。此はイギリスやアメリカの政治家學者と雖も不都合は云ふまい。否彼等も其正義たることを認めねばならぬであらう。十年後滿洲國の基礎が確立する時には、アングロサクソン人の國々に於ても、此精神に則る改造の宣言をなさしめる様に吾々東洋人が指導せねばならぬ。若し彼等の本國に於て此の如き正義の宣言をなすことが出来ねば、せめては其屬領に於てでも此精神を徹底させることである。そうすればフィリッピンの領土内に居住するものは、皆種族の岐視なく尊卑の分別なく、日本人も支那人も土人も米人も平等の待遇を享けることになる。もし夫れ之を米本國に行ふことになれば、王道が太平洋の彼方に及ぶことになるが、米人には、それ程の進歩がまだ、困難かと思ふ、二百年位はかかるであらう。イギリスでも同様である。其屬領印度に於て種族尊卑の岐視分別がなければ、日本品に重税を課せらるゝこともなく外國人の旅行者に微行の刑事をつけることもないであらう。(印度を旅行せる獨人の紀行を参照せよ)又アフリカなどの植民地のホテルに於て亞細亞人の宿泊を斷るなどのこともないであらう。イギリス人が此正義を了解し、政治上に其精神を實現するには今後尙ほ五十年を要するであらう、自然にまかせて置いて、即ち天に順ふと雖も、結局はかかる時代に達すること、は思ふが、吾々東洋人は其時期を成るべく早めるここに力を盡さねばならぬ。即ち白人の霸道を排して亞細亞人の王道を天下に普及することを日夜つとめねばならぬ。

さて十年にして滿洲に王道が行はれたとしても、一舉に之を天下に及ぼさんとすることは早計に失する。印度支那、南洋、印度、東阿、南阿、シベリアなどの順を追うて、遂にはアメリカ、ヨウロッパにまでも押し廣める覺悟を要する。それには滿洲の王道を確固不拔のものたらしめねばならぬ。

## 七 滿洲國執政に謁見

兼ねて執政に謁見を願ひ出て置いた處、六月三日朝に至り今日午前十時半に定つた事を當局から知らして來た。私は法制局の横田氏と自動車に同乗、午前十時過執政府に至り諮議處で待つ。定刻に中島語議の案内により階上の謁見室に至るに、執政閣下は既に出御、直に私に握手を賜はる、私は口頭を以て次の通り述べた。

日本の大阪外國語學校長正四位勳三等中目覺、御當地に参りましたにつき御よろこびを言上、御きげんを奉伺の爲め参内致しました。閣下は先般執政の重職に御就き遊ばされ御めでたう存じ上げます。又爾來御きげんうるはしく國政をみそなはせられることは貴國の爲め慶賀の至りに存じ上げます。この機會に申し上げたい事が御座いますが、時間節約のため書面に認めて持参いたしましたからゆる／＼御閱讀を願ひ上げます。

中島氏は之を滿洲國語に翻譯した。そこで諮議の手を経て左の一書と大阪東洋學會發行の圖書數冊を献上した。

奉呈

滿洲國執政溥儀大人閣下

伏惟。上古我國與肅慎來往。降至勃海。隣交之誼。殆二百載矣。

皇清之興也。其修好雖不及古。而其迹未嘗絕也。則今滿洲國之建設。我國民有復古之思。歡欣鼓舞。豈偶然也哉。當是時。結兩國之交歡有最功者。言語是也。我國語屬乎烏拉爾阿爾泰語族。而清語即滿洲語是通古斯語之一支派。則兩語同其系統。而如漢語。全在乎別系。是言語學者所齊說者。非一人之私言也。我國漢字傳來。用此記國語。然漢字有不合於國語本質者。則或折衷之或別製國字。以補其語焉。於此乎。我國民之浴其恩惠者至大。而漢字習得。由此亦益得易。契丹女真亦與我國同其轍。據漢字各制國字。然尙未足以表其語之真趣也。

皇清太祖有所大見於此。採蒙古文字。以創制清字。頒布之國民。其惠澤也大。清語由之又更發達。猶我國之於假名字也。凡與異民族來往接觸。學其語做其俗。甚者至同化於其族。言語淆亂。遂無統紀。或至失其本土傳統之正音亦數之所不免。是以

皇清康熙雍正乾隆三帝。數降上諭。欲防止言語風俗之變移。然清人遂

年用漢語。而清語終衰微矣。惟康熙之朝。國威赫耀。文物燦然。外國宣教師來齋其文化。亦學清語傳之彼土自此歐人之學者續出。今尙不乏其數。著書亦多。且俄德之大學。有專研究之者。可謂學界一慶事也。我國亦有學之者。距今二百年。荻生徂徠既讀解之。後百年俄皇贈我幕府國書。以清語書之。而蘭語通辭高橋景保解之。其後漢語通辭相謀學御製清文鑑。以國語書之。現下我國東洋歷史科及博言科之學生。

有學清話者。東京大阪兩外國語學校蒙古語部亦課之。蓋一則使學生滿蒙兩語相俟以得裨益。一則使知東洋民族中今尙清話存也。我大阪東洋學會以研究東洋民族言語習慣風俗宗教爲主旨。尤染指滿蒙。往往刊行書籍雜誌。其關於清話者不少。亦蓋欲擴充清話特質長所與貴國固有文化。以傳之不朽也。今清朝發祥之地。滿洲國新建焉。

宣統皇帝。負衆望。爲之元首。欲以行王道。三千萬民人之喜也。可知而已。然竊謂其國語雖襲用漢語。而以清話爲傍系之國語。以保存其國土之本音。是所以崇敬祖宗之靈也歟。而我學界亦受其餘澤矣。亦伏冀貴國要路諸公。開設清話研究所。使書生學修之。保存其國家獨立言語。不堪切望也。

大同元年六月三日

中 目 覺 敬 肅

(奉呈執政之書。不施句點。)

閣下は御嘉納の上、尙ほ種々の御物語りがあつたが、九重の奥深き宮中の事は他に泄らすべきものでないから省いて置く。約十分もあれば充分と思つて居つたのに二十五分かゝつたさ、待つて居つた横田氏が私に話した。此謁見につき横田中島兩氏に深厚の謝意を表する。

思へばエチオピア國攝政ラスタファリ殿下に謁見したのは昭和二年十月であつた。殿下は其後帝位に即かれた。滿洲國執政閣下も近き將來に於て帝位に即かるゝ事を切望して止まぬのは私一人だけではなからう。

(終)

## 滿 洲 の 降 雨

私は去る五月十五日、『亞細亞研究』第十號の「氣候と歴史」の原稿を書き終り、滿洲旅行中に參考資料となるべきものを探したいと思ひながら出發致したのであります。この小論文の中に次の様な事を述べて置きました。

ハルビンと昂々溪の間、昂々溪と洮南の間は今日草野(ステップ)であります。所々に沙丘性の丘陵を見るのであります。之は元と沙漠であつた時代には、強風毎に動いて居つたものであります。今日では植物が生えて固定して居ります。即ち百年か二百年前には雨量が少く沙漠性を帯びて居た地方が雨量の爲め草野に變じたのであります。此などは稍や長期に亘りて雨量が増しつゝある證據でないかと思はれるのであります。

次に明治四十年頃と今日と比較すると、草木の發育の狀態が段々良くなつて來て居る様に見えます。之は單に肉眼の判斷に過ぎませんが、植物學や農學の専門の御方にも伺つて見たいと思つて居ります。もし果して私の見る通りとすれば、二十餘年といふ短期間に於ても雨量が増して來て居るといふことになるのであります。尤も一年間の平均雨量が増さなくとも構ひません。夏の雨量即ち發育に必要な時期に於て増したゞけで充分なのであります。しかし沙丘の場合には夏冬の區別がありませんから、やはり一休に最近二百年間に段々濕冷期に向つて居るのでないかと思はれるのであります。

又滿洲に於ては、近年漢人が西へ西へと拓植を進めて居り、蒙古人は西へ西へ退却して居るのを見ますと、西の方即ち中央亞細亞方面が、漸次住民を容れる可能性が増して來て居るのではないかと思はれます。之が果して事實とすれば、今日滿洲國が建設されるといふ事は天の時を得たものであると存じます。

(五の終り)

併て中央亞細亞の乾濕は多數の學者も認めて居る事であるから事實であります。それが其周圍に對して何處迄影響があるかはまだ研究が出来て居りません。今後の問題として残るのであります。日本まで及ぶかどうかは判りませんが、私は間島や沿海州邊までは其影響が及ぶものと考へて居ります。同様に西の方へは何處まで其影響があるかも未だ判りません。しかし東にも西にも其影響があるとすれば、濕冷期の害を受ける地方は、我國では、東北、北海道などがそれであり、亞細亞大陸ではシベリアがそれであり、歐羅巴では北ドイツ、スカンヂナビア、北ロシアなどがそれであり、北歐諸國が乾熱期の極一七五〇年頃から急激な發展をしたとすれば、今より後二十年で濕冷期に入るころ／＼衰へるのではなからうかとも思はれます。ロシアが首府をレニングラドからモスコオへ移し、濕冷期に得意なイタリア、トルコなどが近年勢力を得て來て居るのも或は氣候の變動に關係がないかとも思はれます。(六)

滿洲へ参りました色々な方面で降雨に就いての所感を聞きますと、大連測候所では、觀測開始以來まだ年數があまり永く經て居らず、年平均の降水量には増加の様相が少しも見えませんが、唯近年雲霧が多くなつたことは確かです。然し是は人口の増加や植樹の結果かも知れませんといふ。又多年滿洲に滞在する或る邦人に聞くに、確かに近年雨が多くなりました、又昔は少しも降らなかつた春の始め頃に中々雨が降る様になりましたといふ。又ハルビンに永く滞在するロシア人などは、雨も多くなり、冬の寒さなどが昔よりは樂になつた様な氣がするといつて居ります。

この様な人の話や感じでは學術上の材料には乏し兼ねます。そこで測候所の統計表に據らうと思つて依頼して置きました。漸く八月になつて呂宋嶋マニラ滞在中に受取りました。即ち東支鐵道ハルビン氣象觀測所出版の『東支線諸驛氣象觀測』の寫してあります。遺憾ながら、之も一九〇九年から一九二八年まで滿二十年間に過ぎませず、其以前の數字が得られないのであります。六百年といふ週期に對して、五十年ならまだしも、二十年といふ年月は餘りに短いのですが、多

少参考になる事がありますから、次に所見を述べて見ましよう。

観測所の統計を見ますと、北滿の氣候は非常に規則正しいものであります。半年が夏、半年が冬でありまして、冬には雨が非常に少く、夏は雨が多く降ります。地中海氣候と正反對であります。そして雨量が七八の二月間最も多いので、一般に之を雨期と申して居りますが、降雨のあるのは四月から九月までの六月間であります。そして西部と東部とは自ら異つて居ります。西部は四月から降雨期に入りますが、東部は五月から十月まで、ありまして、例外として東部が進むことがあり、又西部が遅れることがあります。そして一年間の降水量は西から東へ行くに従つて増して参ります。其結果は蒙古の沙漠地方から東滿の森林地方に變つて行くのであります。

今統計に載つて居る二十年間を、五年を一期として一年の平均降水量と冬期即ち乾期六月間の平均降水量とを表示するに、次の通りになります。統計には次の各月の数字が欠けて居ります。

マンチュリア	一九一八年	二、三、十月
チ、ハル	一九〇九年	五、十一月 一九二〇年 三月
第一期	一九〇九年—一九一三年	五年間
第二期	一九一四年—一九一八年	全上
第三期	一九一九年—一九二三年	全上
第四期	一九二四年—一九二八年	全上
第一表	年平均降水量	

この欠けた各月は同一期間の同じ月の平均数で補ひました。此は嚴密に言へば學術的ではないけれども、大勢を知るには此方法が最も合理的だと思ひますから、そう致しました。降水量はミリメートルで示してあります。

マンチュリア	チ、ハル	ハルビン	イメンボ
第一期	二五六、九	三九四、八	五四四、四
第二期	二一四、八	四三〇、三	六一九、七
第三期	二六七、二	二六七、八	四八三、九
第四期	二七七、五	三二三、〇	五四五、五
第二期	乾期平均降水量		七四七、四

マンチュリア	チ、ハル	ハルビン	イメンボ
第一期	一三、五	一三、三	五五、五
第二期	一七、八	二九、二	五〇、〇
第三期	一七、九	二〇、〇	五三、五
第四期	二二、六	三〇、〇	六五、九
			九七、四

右の表により、私共は何を教へられますか。壹年間降水量に於ては、東部も西部も餘り増減がない様ですが、乾期に於ける降水量に至りては、東部では稍や減少の様が見える位ですが、西部では漸次増して來て居る事が判ります。殊にマンチュリアに於ける乾期降水量の増加は著しく目につくのであります。之は二十年といふ短期間ですから、是を以て直に濕冷期に向つて居るに斷定するのは早計ですが、若し此状態が尙は續くものみすれば、我々は次の様な事が言へると思ひます。

- 一 中央亞細亞の週期的氣候變動は滿蒙地方に關する限り東へ行くに従つて薄弱となること
- 一 一年間の降水總量には變化少きこと

一 濕冷期には、中央部に於て乾期の降水量増加し、之が農牧に好影響を與ふること

一 現今は濕冷期に向ひつゝありと思はるゝこと

此結論の正否は尙ほ數十年の觀測を要すと思ひますから、次代の研究者に御譲りして、私はこれで筆を擱きたいと存じます。

(昭和七、九、一五稿)

昭和七年十月一日印刷  
 昭和七年十月五日發行

(非賣品)

印刷者 河 本 芳 治 郎

大阪市天王寺區上本町七丁目六番  
 電話 南 四 二 八 五

終

